



沖大祭閉会挨拶を終えた照屋一輝実行委員長

Contents

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------------|
| 02 2017年年頭挨拶 | 09 研究のひろば（高良沙哉）/わがゼミナール（吉本篤人） |
| 03 私立大学研究プランディング事業 | 10 学生インタビュー（神谷純輝） |
| 04 2016年沖大祭 | 12 あのは人は今（故宇井純） |
| 06 硬式野球部南部九州ブロックの頂点 | 14 創立60周年記念事業 |
| 08 リレーエッセイ（マルチ 棚原大介） | 15 父母懇談会／外部評価委員会 |

アラキ先生と学長室のクーラー

仲地 博

半世紀も前の話である。北海道大学に入学し間もない頃、四国出身のIさんに「アラキモリアキって知ってるか」と聞かれた。Iさんは、30歳にして大学に入った勉強家であり、紳士で親切なのでクラス皆から尊敬されていた。ヤマトにいるウチナーンチュの有名人は大抵知っているつもりであったが（要するに全国的に知られた沖縄出身者は現在のように多くなかつたのである）、そのアラキなる人物を私は知らなかつた。太閤検地の研究で、アラキ旋風と呼ばれるほどの衝撃を学界に与えた人だと、Iさんは教えてくれた。その論文が、東京大学の卒業論文と聞いて、私は驚き、アラキの名前は、深く脳裏に刻まれた。

その後、安良城盛昭が突然身近になつた。安良城先生が沖縄大学の学長になられたのである。当時私は、沖大の非常勤講師で週に1度講義をするだけなので、「ああ、これがかの有名な安良城先生か」と思いつつ、遠くから眺める程度であった。声が大きく、まるでライオンのようであり、怖くて近づけなかつたという面もある。その安良城先生のことでの、忘れられない話がある。先生が、こんなことを言わされたのである。「学長室にクリーラーが入っていないのは県内大学で沖縄大学だけだ」。沖縄がまだ貧しく、クリーラーが高嶺の花の時代である。続けて、「だが、図書館にクリーラーが入っているのも沖縄大学だけだ」。学長より学生を大切にするという、この話に私は感銘を受けた。

40年も前のことでのアラキ発言は、ほとんどの人が忘れているが、私は、学生を大切にする沖縄大学の誇りあるエピソードとしてことあることに話してきた。その沖縄大学の学長を勤めることができた幸運に私は感謝している。

学長コラム⑦

2017年 年頭挨拶



学長仲地博

新年おめでとうございます。年頭にあたり謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

の私立大学と
324の私立短大を対象としたもので、志慕した大学数は198大学、その中から40大学が採択されました。研究プランディング事業と

は、研究を教員個人のレベルに留まらせず、大学の組織的取組にし、全学的な看板となる研究を推進する事業です。この事業を行うには、大学を取り巻く現状と課題を適切に分析し、研究成果を戦略的に発信する全学的な体制の整備が前提となります。この事業に採択されたことは、沖縄大学の地域研究の実績と体制が評価されたことを意味します。沖縄大学の掲げたテーマは、「沖縄型福祉社会の共創」で地域研究所を中心として研究と実践が遂行されます。

二つ目が教育改善の進捗状

況が評価され文部科学省の私立大学等改革総合支援事業の対象大学に採択されました。沖縄県内の4私立大学で初めてのことです。一昨年度は、この事業で地域貢献が評価され採択されています。

学生も元気です。硬式野球部、男子バレー部、空手道部などの活躍、教員採用試験に36名の合格、沖大祭・オーブンキャンパス等での学生の活躍にも目覚ましいものがあります。今沖縄大学は、教育でも地域貢献でも研究でも、小さくともキラリと光る大学でありますと自信しております。

18歳人口の減少、青年の大都市の志向など地方の小規模私立大学を取り巻く状況は極めて厳しいものがあります。その中で、新年が来年の創立60周年に向け、さらに100周年に向けて着実な一步となる年となるよう全力を尽くします。

学生、教職員、同窓会、後援会(ご父母)そして沖縄大学が立地する那覇市並びに沖縄県などすべての関係者のご支援とご参加をお願いいたしまして、年頭のご挨拶といたします。



理事長 長濱 正弘

明けましておめでとうございます。皆様方には希望に満ちた2017年の新春をお迎えのことと、心よりお慶び申し

を、P D C A サイクルの活用により、さらに強力に推進してまいりました。またスポーツをはじめ学生の各分野での活躍が目立ち、意識の高まりを感じる年되었습니다。

上げます。昨年
中は引き続き
沖縄大学に対
しまして御支
援、御協力を
賜り厚くお礼
申し上げます
昨年は教育
力向上による
学生満足度を
高める「教育
改革」の取組

1. 別館及び隣接小グラウンドの整備
昨年取得した別館を整備し、地域共創の拠点となる「地域研究所」を移転。また学生の部活動やグラウンドと連結したス

の整備

3. 歴史資料室の設置

沖縄大學の特殊な歴史（設立背景、日本復帰の際の存続問題など）を関係者はじめ県民皆様が設置する計画です。

お願い申し上げます。
本年が学生はじめ関係者の皆様にとりまして、実りある年になりますよう心から祈念申し上げ年頭の挨拶といたします。

さて沖縄大学は皆様の御支援のお蔭を持ちまして2018年6月に創立60周年の節目の年を迎えることになりました。60周年を機に学生の教育環境の更なる充実を目的

2. 学内食堂の設置

学内食堂は沖大長年の願いでした。本館1階のホワイ工（ロビー）に隣接したテラスに設置する計画です。

解のもと御寄付も募り実現に全力を注ぎたいと思います。多くの皆様方の御協力よろしくお願い申し上げます。

さて沖縄大学は皆様の御支
援のお蔭を持ちまして

ボーツ学習、合宿セミなどの場所とします。

に知つて頂くとともに「原点を見つめる場」として、あわせて生の心、ソウルの活動の原点

私立大学研究 プランディング事業

沖縄型福祉社会の共創 —ユイマールを社会的包摶へ—



事業採択について記者発表する島村聰地域研究所長（左）と仲地博学長

- ①重点研究を「沖縄型福祉社会の共創」として沖縄の子どもの貧困問題に焦点をあてた研究を推進
- ②地域研究所の研究費を増額
- ③学内競争的研究費は「福祉社会の共創」を優先
- ④研究と実践の場として地域共創拠点を整備
- ⑤那覇市および中小企業・家庭支援の輪を広げる
- ⑥研究成果は学生等の実践により社会へ還元する

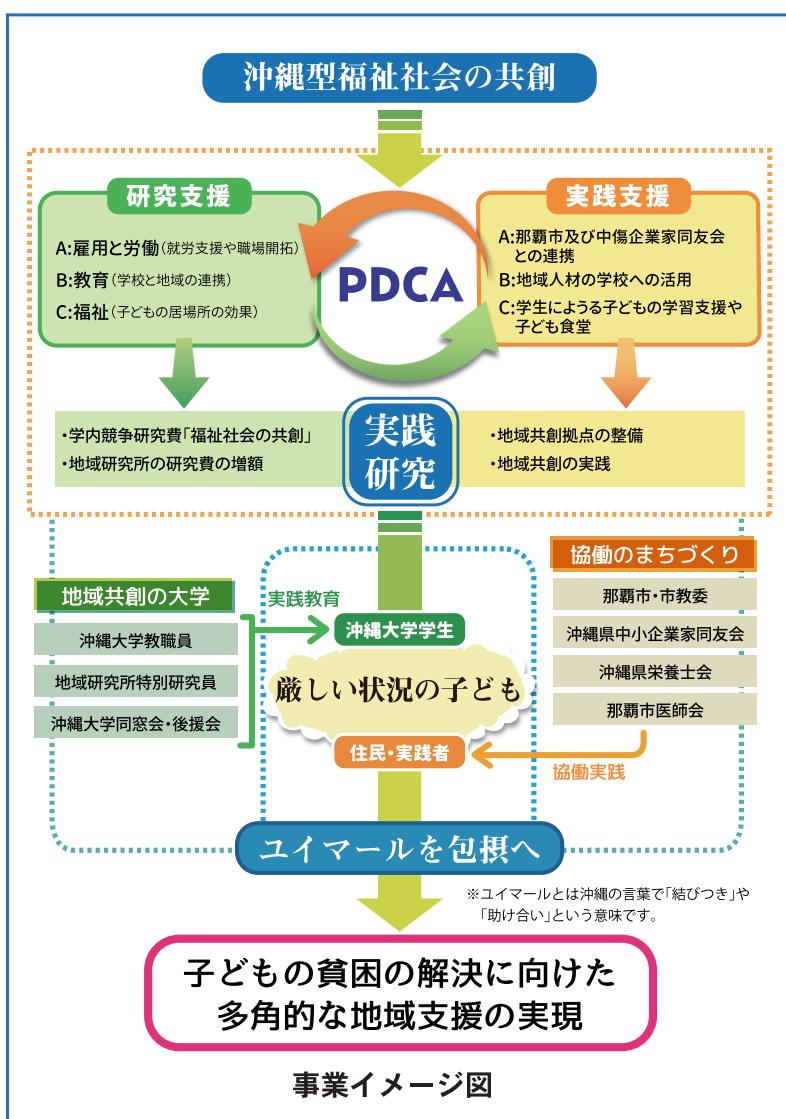
【6つの事業概要】

学長のリーダーシップの下で私立大学の看板となる組織的な研究を推進する文部科学省の「私立大学研究プランディング事業」に本学の「沖縄型福祉社会の共創—ユイマールを社会的包摶へ—」が採択されました。私立大学研究プランディング事業は本年度に新設され、応募した全国198大学・短大から40大学が採択されました。県内からの採択は本学が初めてとなります。本事業では、沖縄の子どもの貧困問題を優先課題とする全学的な研究に取り組みます。沖縄大学は地域に根ざす大学として沖縄にしつかり根を張り、地域と共に地域の未来を創つていきたと祈念します。私立大学研究プランディング事業は、そのような沖縄大学に追い風を吹かせるものといえます。

沖縄の子どもの貧困問題に焦点をあてた問題解決型の実践的研究を学内で公募し、今年度は以下の研究活動が始まりました。
地域研究所では、これらの研究を継続、発展させるために、研究活動の場の提供、学生の参加促進、研究発表の機会の提供を行いました。

会の提供といったサポートを行う予定です。これらの実践研究が雇用・教育・福祉各分野に関わる人々の協働的取組みを引き出し、子どもたちの自己効力感の向上に繋がる「社会的包摶」を実現させることが本研究事業のブランディングと言えます。

【共同研究】
・次世代を担う若者に向けた新たな「キャリア教育」「労働法・労働社会」「医療制度の拡充」の再構築のための検証（班長 山代寛）
・沖縄の若者をめぐる雇用問題の把握と、企業の先進的取り組み事例の調査・研究（班長 島袋隆志）
・子どもの居場所等の意義と連携に関する研究（班長 島村聰）
・地域の提供といったサポートを行う予定です。これらの実践研究が雇用・教育・福祉各分野に関わる人々の協働的取組みを引き出し、子どもたちの自己効力感の向上に繋がる「社会的包摶」を実現させることが本研究事業のブランディングと言えます。



第57回 沖大祭

ハイサイ！行きたい！沖大祭！
おつきじだい♪ レボリューション

学生の力で創りあげる最大のイベント、沖大祭。

教室の講義だけでは味わえないこと。課外活動だからできること。イベントに関わることは、地域や社会と関わりながら実践的に学び、成長できる通過点(チェックポイント)です。自分たちだけで企画し、運営することの楽しみや苦労。その達成感は、まさに「最高で——す！」

今年も2日間の開催で、約2千7百名の来場者

を迎えました。(学生支援課 田丸)





第57回 沖大祭を終えて

沖大祭実行委員長（法経学科2年）照屋一輝
(泊高校普通科通信卒)

11月5日・6日に第57回沖大祭が開催された。今年5月に実行委員会を発足してから約半年間、本当に様々なことがあった。

今回私は沖大祭実行委員長として企画・運営に携わった。きっかけは今年度から始動した「国場555プロジェクト」で、その名の由来は沖縄大学の住所である国場555番地だ。活動内容は、学生・教員・職員の三者で協力し継続的に沖大を盛り上げていくというものである。私はこのプロジェクトが始動した当初からメンバーで、新入生歓迎球技大会の実行委員長や沖大祭実行委員長を務めることになった。

私は1年次の頃から心に秘めていた想いがある。それは「沖

大生の可能性を引き出したい」という想いだ。今まで色々な沖大生と接してきた中で、「何かしたいけど、何をしていいか分からぬ」という学生をよく見てきた。そうした悩みを持つている学生に対して、新入生歓迎球技大会や沖大祭というイベントを通して何かを実現できる場所と機会を提供することで沖大生の可能性を引き出すことにつながると私は信じている。

今年度の沖大祭実行委員は約50人、そのほとんどが1、2年生であつた。そのため企画・運営については本当にゼロからのスタートであつた。学科・学年も様々であったため、最初は意思疎通で意見が食い違つたり、モチベーションの差で悩んだり、ミーティングが捲らなかつたりと様々な困難があつた。しかし、スポーツ大会や合宿、オープンキャンパスなどを通して全員が同じゴールを目指しながら切磋琢磨することで、自然と学科・学年の壁を越え1つのチームとなることができた。

今年の沖大祭では、地域のこども達や家族連れての参加が多

いという特徴を考慮して託児所を準備したり、中庭に飲食スペースを設けて来場者が居やすい空間を提供した。ステージでは実行委員会企画のイベントを始め、アーティストをゲストとしてお迎えして、沖

大祭を大いに盛り上げてくれた。またSAKI ISHIMA MEETTINGの新良幸人さんは沖大に在席していた

としてとても誇りに思えた。

様々な新しい試みを実現できたり沖大祭。思い返せば一番成長し自身の可能性を引き出したのは、実行委員会のメンバー一人一人であると思う。私は実行委員長を務めたことによって沖大の魅力をたくさん知ることが出来た。中でも一番素晴らしいと感じたのは、沖大生一人一人を沖大全体が大切してくれるということである。知れば知るほど沖大生のことが好きになり、最高の大學生だと思うのである。だからこそ、その魅力を他の沖大生にも伝えたい。キャンパスは大きいとは言えないが、小さい中にも大きな夢がたくさん詰まっている。今回の沖大祭を通して、少しでも沖大の魅力を伝えることが出来たならと切に願う。そして協力して下さった全ての方々に感謝の意を表したい。

硬式野球部

南部九州ブロックの頂点に！

第96回九州地区大学野球選手権南部九州ブロック大会が10月4日から熊本県の藤崎台球場で開催され、本学硬式野球部が昨年秋に続く2季ぶり4回目の優勝を飾った。

【優勝までのあらすじ】

1回戦は、宮崎大学（宮崎地区）との対戦。先発は、今年の夏から台頭してきた2年生の左腕、與那嶺光（法経学科2年・石川）。しかし、立ち上がりに制球が定まらず3点を先制される、苦しい試合となつたが、その後打線が奮起し、9対4で勝利。準決勝へ進出した。大城監督にとっては、通算200勝目（1993春～学生監督含む）となる記念すべき試合ともなつた。

続く準決勝は、地元、東海大学九州キャンパス（熊本地区）との対戦。先発は、昨年からの活躍で評判の高い左腕エースの山城修人（福祉文化学科健康スポーツ3年・具志川商業）。沖大4回裏の攻撃、2死3塁から9番捕手、佐喜真拓哉（法経学科2年・真和志）が左前打を放ち1点を先制。その後、エース山城の粘りのピッチングにバックが守備で応え1対0で接戦を勝利。昨年に続き決勝へ進出した。

決勝戦は、第一工業大学（鹿児島地区）との対戦。先発は、連投の左腕エース山城修人。5回に1点を先制されたが、沖大6回裏の攻撃、1死1塁から3番左翼手、小谷陽大（法経学科3年・前原）が左越えの二塁打を放ち同点に追いつく。続く沖大8回裏の攻撃、1死2・3塁から3番小谷の犠牲フライで逆転の決勝点を挙げ、投げては先発の山城とバックの固い守備で時折のピンチを守りきり、2対1で前日に続く接戦の勝利。見事2季ぶり4回目の優勝を果たした。

春の大会は、南部九州ブロック優勝で全国大会への切符を手中にできるが、秋の大会の道のりはさらに険しく、九州3連盟決戦で勝ち残った1大学だけが全国大会へ出場することができる。沖大は、セカンドステージとなる九州3連盟決戦、第23回九州大学野球選手権大会予選トーナメント戦（10月15日～福岡市のF.I.Tスタジアム）へ挑んだ。1回戦は、日本経済大学（福岡六大学連盟）との対戦。沖大2回表の攻撃、2死から8番三塁手、吉濱墨（法経学科1年・知念）が中堅越えの三塁打を放ち2死3塁とし、続く9番捕手、佐喜真拓哉が右前打を放ち1点を先制。その後に追いつかれるものの、沖大5回表の攻撃、2死2塁から4番右翼手、平良昇之裕（法経学科4年・浦添工業）が右前打を放ち2対1と再び逆転に成功。先発の2年生左腕、與那嶺光は5回を投げ無安打におさえる好投を見せていたが、沖大6回裏の攻





沖大打線の核となった不同の3番、4番（上）3番左翼手 小谷陽大
(下)4番右翼手 平良昇之裕

沖大優勝の柱となった2人の左腕投手（上）山城修人、(下)與那嶺光

守備でミスからピンチを招く。リーフに銘苅瑞輝（法経学科1年・知念）、エースの山城修人を送り出す粘りを見せたが、再び3対2と逆転を許す。ところがここから粘る沖大の7回表攻撃、1死2塁から3番小谷が右中間への二塁打を放ち再び3対3の同点に追いついた。しかし、8回裏に逆転タイムリーを許し、惜しくも4対3で敗れた。昨年に続くヤフオクドーム出場の期待も高まる中、逆転に続く逆転の大接戦を展開したものの、急願の全国大会出場は果たせなかつた。しかし、昨年に続く秋の優勝となり、硬式野球部の全国大会出場への期待は、益々高まっている。

【亀川良太（主将・浦添高校出身）のコメント】

私達は、春の県予選リーグで悔しい思いを経験し、秋のリーグ戦に臨みました。チームとしては、まず県予選リーグの1位通過を目標において、達成の都度、新たな段階目標を定めて全国出場を目指しました。南部九州ブロックでの試合が多く、結果、粘りの野球で優勝することができましたが、最終目標におく全国大会出場には一步届きませんでした。これから冬の厳しい練習を乗り越えて、春の大会では必ず全国大会出場を果たしたいです。また、大学、同窓会、後援会の方々にもたくさん支援を頂いている事を部員一同とても感謝しています。その気持ちをプレーや結果で恩返ししたいと思います。

【大城貴之（監督）のコメント】

台風の影響もあり1日早く出発するなど難しい調整も強いられましたが、そのような状況下においても相次ぐ接戦でベンチ、選手ともに各自の力を發揮し、再び優勝旗を取り戻すことができました。震災のあった熊本の地で野球ができる喜び一杯の選手が集い、堂々と競い合う光景は、普段とはひとしお違つたものがありました。目標の全国大会出場は、またしても果たせませんでしたが、その悔しさを持つて、来年の春に選手と共に懸けたいと思います。

今回は、2週間に渡る2度の遠征となりましたが、大学、同窓会、後援会から多大なご支援を頂きました。お礼を申し上げます。今後ともご支援の程宜しくお願い申し上げます。

私の一番の関心事は、「軍隊は人間の安全を真に保障するのか」ということである。これに関連して現在は、二つのことを主に研究している。

一つは、軍事性暴力である。戦時性暴力は軍隊の構造的暴力だとされる。戦時において軍隊は、攻撃・略奪の手段として、戦利品として、戦時の娯楽として、性暴力を犯してきた。旧日本軍も「慰安婦」制度や大規模な強姦を行つた。また軍隊は、平時にも駐留受け入れ地域において、性暴力を犯す。平時の軍隊による性暴力もまた、男性性攻撃性、凶暴性という軍隊の特性に基づく構造的暴力だと考える。性暴力は被害者の尊厳を徹底的に脅かす暴力である。しかし、加害者が軍人である場合には、被害者の頭越しに国家間で政治的解決が模索される。

その一方で、加害責任は軍人個人のものであると考えられるため、根本的には、軍隊や国家の責任は問われない。しかし、軍隊の構造的暴力である以上、國家、軍隊の責任は問わるべきであり、国家、軍隊

の軍隊による性暴力もまた、男性性攻撃性、凶暴性という軍隊の特性に基づく構造的暴力だと考える。性暴力は被害者の尊厳を徹底的に脅かす暴力である。しかし、加害者が軍人である場合には、被害者の頭越しに国

の軍隊による性暴力もまた、男性性攻撃性、凶暴性という軍隊の特性に基づく構造的暴力だと考える。性暴力は被害者の尊厳を徹底的に脅かす暴力である。しかし、加害者が軍人である場合には、被害者の頭越しに国

の軍隊による性暴力もまた、男性性攻撃性、凶暴性という軍隊の特性に基づく構造的暴力だと考える。性暴力は被害者の尊厳を徹底的に脅かす暴力である。しかし、加害者が軍人である場合には、被害者の頭越しに国

の軍隊による性暴力もまた、男性性攻撃性、凶暴性という軍隊の特性に基づく構造的暴力だと考える。性暴力は被害者の尊厳を徹底的に脅かす暴力である。しかし、加害者が軍人である場合には、被害者の頭越しに国

の軍隊による性暴力もまた、男性性攻撃性、凶暴性という軍隊の特性に基づく構造的暴力だと考える。性暴力は被害者の尊厳を徹底的に脅かす暴力である。しかし、加害者が軍人である場合には、被害者の頭越しに国

の軍隊による性暴力もまた、男性性攻撃性、凶暴性という軍隊の特性に基づく構造的暴力だと考える。性暴力は被害者の尊厳を徹底的に脅かす暴力である。しかし、加害者が軍人である場合には、被害者の頭越しに国

の軍隊による性暴力もまた、男性性攻撃性、凶暴性という軍隊の特性に基づく構造的暴力だと考える。性暴力は被害者の尊厳を徹底的に脅かす暴力である。しかし、加害者が軍人である場合には、被害者の頭越しに国

研究のひろば

軍隊は人間の安全を保障するのか

福祉文化学科教員(憲法学)

高良 沙哉



もう一つは、自衛隊の軍備強化である。筆者は、日本国憲法9条に基づくならば、軍隊としての自衛隊は憲法違反だと解釈する。しかし政府は、必要最小限度の実力は憲法違反ではないとして、自衛隊を合憲として軍備を増強してきた。現在、「島嶼防衛」の名の下で、那覇基地の強化や与那國島への自衛隊配備がなされ、石垣、宮古の自衛隊配備も計画されている。筆者は、国境付近における新たな軍隊の配備は、周辺地域との軍事的緊張を高め、地域住民の安全、平穏な生活にとって重大な問題を生じると考えている。

2016年度の吉本ゼミは、3年次8名、4年次9名の計17名の学生で構成されており、学生の多くが2年次ゼミからの持ち上がりという特徴がある。2年ないし3年の間、ほとんど同じメンバーで活動しているため、気心の知れた者同士が集うゼミといえる。

メンバーやには八重山出身の学生が多いという特色があるが、これには、偶然ながらゼミの卒業生に八重山出身者がおり、その者からの口コミにより吉本ゼミに後輩・友人が集つたという縁がある。その縁あってか、夏期休暇中に行われる宿泊

わがゼミナール

判例を読み解く ゼミ活動を堅実に

法経学科教員(民法) 吉本 篤人



石垣島合宿でのフリータイム、やいま村にて

書かれた事実関係との間には、微妙な隔たりがあることもあります。地味ではあるが堅実な活動の甲斐あつてか、わがゼミは、試験対策が内容のゼミでないにもかかわらず、那覇市役所行政上級、行政書士、南城市役所行政上級等の現役合格者をそれぞれ輩出していることも特徴である。

地味ではあるが堅実な活動の甲斐あつてか、わがゼミは、試験対策が内容のゼミでないにもかかわらず、那覇市役所行政上級、行政書士、南城市役所行政上級等の現役合格者をそれぞれ輩出していることも特徴である。



学生インタビュー

外に向いていた目が、逆に内に向いた。

神谷 純輝さん 国際コミュニケーション学科4年（豊見城高校卒）

今年は5年に一度の「世界のウチナーンチュ大会」開催年。県の関連事業でペリーを訪問してきたという神谷純輝さんに、ペルービー体験後の心の変化を聞きました。

—はじめまして。一生懸命勉強していると顔に書いてありますよ。

ていた時に、台湾から来ていた留学生と知り合って。連絡のやり取りとかしているうちに、ダイレクトに気持ち伝えたいというのがあつたので。「中国語いいな」と。

ショックを受けていました。
—恒例のJAL中国語スピーチ
コンテスト沖縄大会ですね。中国
語を勉強し始めて半年で、特別賞
とは。

やはり3年の時にセブに行つたのが大きいです。海外は必ずと行きたいと思っていたんですけど、1年、2年の時は踏み切れなくて、3年の時にいろいろ環境も整つて、もうこの時期にしか行けないないとセブが最初の海外になりました。それから海外が面白くなつて、台湾に行つたり、今年の8月にはペルーに行きました。

ペルーは、どのような経緯で?

県の派遣事業です（海邦養秀
ネットワーク構築事業）といつて、
沖大の掲示板で募集しているのを、
知りました。それを見て行きたい
など。応募は100人くらいあつ
たそうで、大学生5名、高校生5名
の10人で2週間行けることになり

ペルーに関心を持ったのは?

2年、3年の時、第2外国語はスペイン語を履修していて、先生が

聞いていたんですけど、文化とか移民の歴史などの話を聞いて、ぜひ自

語も使つてみたいと。事前研修も全部どう用ひつていいから勉強

できる機会もありました。でも、実際現地に行って、いろいろな人と

交流して、そこで初めて知ること
が多かつたですね。沖縄みたいに

チヨーデーというのもあって、ペルリ人の国民性と、うか南米のノ

チヨウテー」といふのもあつて、ハル一人の国民性というか南米のノ

りが気に入りました。

一 行く前と後では、どんな変化が？

それまでのセブや台湾に行つた経験とは違つて、今回の旅は県系人と交流したことで、より沖縄のことを考えるようになりました。外に行って、逆に内のことを探ることができた。

県内にいる僕らよりも、南米にいる県系人の方のほうが沖縄のことを知つていたり。なんというか、とても沖縄のこと愛してて。僕らと同世代の人々はみんな三線弾いたり、舞踊やつたりして、一世、二世が僕らの世代の三世、四世に沖縄の伝統文化をうまく継承していくということがわかりました。

一 向こうの人に、アイデンティティに気づかされた。

まさか、ペルーでこんなことを感じるんだと、驚きました。他の旅では日本人と丸められてしか見られないんですけど、今回は「沖縄の人？」みたいな僕も沖縄の人だよ」と言えたし、感じることができた。

一 アイデンティティを意識すると、何か変わりますか？

自分が生まれ育つた場所をもつて大事にしていきたいという気持ちが出てくるというか。もともと琉球の歴史があつたじゃないですか？

か。中流の歴史とかにも興味が出てきて、いま授業も取つていますが、歴史を勉強していると沖縄と日本は違うなどいうのがあるし、自分がつてくると、もつと内側が見えることがあります。

一 どうすることですか？

僕が無知な状態で勉強していくと、沖縄はいろんな国との関わりがあつたんだなということがわかつてくる。そして台湾に行つてみて、ああこういうことなんだなと勉強したことを実際目で見ると、今度は逆に沖縄のことをもっと深く知りたくなる。そういうふうに、勉強したことを見た先とつながつて、それをまた沖縄につなげているのかな。

沖縄のことがわかつてくると、もつと自信をもつて「沖縄の人だ」と言えると思います。海外の学生と交流する時に必ず聞かれるので、その時自分の住んでいる場所をアイデンティティをもつて話ができるすごくいいと思います。

一 日本についてどう思いますか？

いい面と悪い面があつたりして、いい面は主に経済的なことじないですかね。いろんな基盤をつくってきたから。でも、政治的にはあまりいいように扱われていななどいう気持ちがあります。基地の問題もそうですし。日本から悪いのが流されている感じがする

ので、あんまり上の人は好きじゃないです。海外で紹介する時も、日本より沖縄のことを紹介してます。それだと自信もつて言えます

一 「上の方」って日本政府のことを言っていると思いますが、そうすると沖縄は下なわけですか？

ただ、いまいろいろ基地問題とかもめたりしている中でも、やっぱり「沖縄だよ」という誇りを持つていた方がいいと思います。

一 誇りですね？

一 ところで、どのような勉強スタイルを？

まずは気持ちを伝えられるように、語学力は絶対に必要なので、語学の勉強に集中していますが、他にも授業で習つたことは、習つてもやりたいことは、これじゃない」と。だけど親が「やりたいことをサポートするから、大学は続けてみた」と。1年の後半に部活をやめて、これまでやつていたことを全部やめて、自分がやりたいことが経験できることを手探りでやっていくことにしました。僕もけつこう悩んだんですけど、これは他と替えきれないと思って、どうしても自分を成長させたかったし、もつといろんなことをしたいという気持ちの方が強かつたので、それまでやつていたことから学ぶよりも、こつちに来ました。

後輩には、授業をうまく使うというのと、単位が目的でなくそれ以上を目指してほしい。習つたことを生かせるプラスの活動を、自分でアクション起こしてやること、それが大学生だからできることがあります。

たので、ひたすら語学の勉強をして、少しでわかるようになつたので、セブへ留学に出でみようと。話を聞いて終わるタイプが多いと思うんですけど、聞いたことは實際見えなくなる。逆に大学生は、定まつていなかからこそ自分でいろんなことを見てきて、勉強とうまくつなげていければいいのかな。刺激を受けて定めたらいいだけなので、これは大学生のうちにやつていた方がいいと思います。

一 そのように考えるようになったのは？

1年の時にこのことを考えていて、その頃は、本当は大学を半年でやめようと思っていたんです。「俺のやりたいことは、これじゃない」と。だけど親が「やりたいことをサポートするから、大学は続けてみた」と。1年の後半に部活をやめて、これまでやつていたことを全部やめて、自分がやりたいことが経験できることを手探りでやっていくことにしました。僕もけつこう悩んだんですけど、これは他と替えきれないと思って、どうしても自分を成長させたかったし、もつといろんなことをしたいという気持ちの方が強かつたので、それまでやつていたことから学ぶよりも、こつちに来ました。

一 こちらの学科というより、こちらの世界を選んだのですね。

留学したいという気持ちがあつたので、ひたすら語学の勉強をして、少しでわかるようになつたので、セブへ留学に出でみようと思つたのですが、これが自信もつて言えます

てこようというのが自分にはあつて、だから一度見ることに価値があると思って、全部つなぎました。そうしたら、ペルーに行つて、意外にもウチナンチュのアイデンティティを覚えて帰つてきた。外に向いていた目が、逆に内に向いた。これは新たな発見で、びっくりでしたね。内を強く持つていれば、外で通用すると思うようになります。おじいちゃん・おばあちゃんの頃は言いにくかったと聞きますが、いまは自信もつて「沖縄の人です」と言えたりするんですけれど。

一 内向きに視野が広がった。

これは新たな発見で、びっくりでしたね。内を強く持つていれば、外で通用すると思うようになります。おじいちゃん・おばあちゃんの頃は言いにくかったと聞きますが、いまは自信もつて「沖縄の人です」と言えたりするんですけれど。

一 留学後は？

観光で、語学を使ってうまく伝える仕事をしたいと思っていました。通訳とかもやつてみたくて、相当な努力が必要だと思うんですけど。

私は間近で見ておりましたが、化けの
先生方と宇井先生のどちらが力がある
か、学生の目には歴然たるものでした。
しかし、宇井さんは実力があり、
も助手に据え置かれました。結局21年
間東大で万年助手だったわけです。
宇井さんは『公害の政治学』といふ
大変重要な本を68年に出されて、「公
害に第三者はない」と発言されていま
す。私は翁長知事に頼まれて、辺野古
の埋め立てに法的瑕疵はないかどうか
を検討する「第三者委員会」の委員
になつたのですが、公害に第三者はな

その後65年に博士課程を終えて工学部都市工学科の助手に任官されますが。私は都市工学科の一期生で、水質実験では宇井さんに徹底的にしごかれましたけれども、宇井さんは助手としてともかく給料がもらえて、家族を養えるという状態になつた時に新潟で第2の水俣病が発生したことを知つてしまふわけです。富田八郎の筆名で出していたあのデータがきちんと伝えられなかつたために第2の水俣病が発生してしまつたという反省の念から、宇井先生は新潟水俣病に関わることになつたわけです。

はある意味、宇井さんの人生を決定づけた日です。そこで宇井さんはどんなものを見てしまうわけです。チツソの排水を飲ませた猫が狂うという実験ノートを見ててしまうわけです。そして63年、現代技術史研究会会誌に「富田八郎」これは「どんだやろう」と読みますが、その筆名で水俣事件に関する連載を始めます。東大の中では御用学者の方が強くて、実名を出して連載を書くことができなかつた。

宇井さんが東大に戻ってきた時に
はもう我々は誰もいませんでした。宇井さんはその中で自主講座を立ち上げて、15年間続けるわけです。東大自主講座というものは日本の環境問題を考える場合、多くの人たちがその中から育つていった大変重要な活動となつたわけですけれども、86年に沖縄学に赴任されたわけです。それからのことにつきましては、宇井ゼミOBの後藤さんによると語つていただきます。

宇井さんは、68年の頃、WHOから奨学金をもらってヨーロッパに調査に行かれるわけです。東大闘争の一番シビアな時に日本におられませんんでした。我々学生は、なんでこんな肝心な時にいないんだと怒りまくりました。しかし宇井さん自身も、また多くの方々も、宇井さんはこの時期に日本にいなくてよかつたとおっしゃっています。東大にいたら必ず消耗し、その後の宇井さんの活動を不可能にした

いというのは、第三者づらをするのは必ず加害者の味方だと、中立を装う者は加害者に回ることになるんだといふ、宇井さんが多くの公害問題の現場から結論したことなんですね。私はことあることに辺野古新基地建設には反対だと言つてゐるものですから、議会の中には「桜井は中立ではない」と言う方がおられましたが、そうですと中立ではありません。研究者の端くれとして目を開けていれば、沖縄に基地をつくることがどういうことなのか意見はあつてしかるべきです。賛成なのか、反対なのか。わからないという意見はあり得ない。

②宇井ゼノン 後藤哲志

②宇井ゼミ〇B 宇井先生が主に沖縄大学で取り組まれたことについてお話しします。

私は89年の入学生ですが、宇井先生は「最も問題が多い所に身を置く」と言つて沖縄へやって来たそうです。88年に沖大創立30周年記念事業で地域研究所が設置され、初代所長になりました。沖縄だけでなく奄美を含む琉球弧、そしてアジア太平洋の島々までを地域として、沖大の研究者だけでなく地域の実践者に特別研究員になつていただき、多くの共同研究班を立ち上げて地域研究に取り組みました。その頃、後で登壇する宮城恵美子さんは宇井先生と地域研究所をハンドリングされていました。当時は白保の新石垣空港建設問題にも力を入れ、地域研究所はIUCNの正会員になり、国際社会の力を借りるということもしました。以後、沖大と石垣島白保とのつながりはいろいろな形で続いており、最近は盛口満先生のゼミが白保に通っています。

89年には科学実験室が整備されました。文系の沖大になぜ実験室を置くのかと議論になつたそうですが、2千円くらいの設備があれば環境問題解決の役に立つ教育ができるということでスタートしたそうです。しかしながら沖大の実験室というものは南の途上国では普通にあると、だから沖大の実験室でできることは南の国々の実験室のモデルになるだろうと話していました。実験室には東大から送られてきました。

段ボールが積まれていて、私は段ボールから試験管を取り出すという手伝いから始めました。

その科学実験室では、94年から「沖縄環境フォーラム」という自主講座が始まりました。月に1回、夜に開かれるオーブンな勉強会で、環境問題の現場で頑張っている人たちが集まる拠点になりました。そうしたネットワークで学会などの全国大会を沖縄で開くことになりますが、それは日本の各地で活躍している市民や研究者に呼びかけて、沖縄の問題を実際に見てもらい、解決策を議論し、その成果を掲げ書にまとめ、日本の各地に持ち帰ってもらうという活動でした。

実験室では、主に水のことを取り組みました。NHK教育番組に「人間生物学」というシリーズがありましたが、94年に宇井先生の「日本の水はよくないりますか」の撮影現場になりました。2、3号館は雨水の利用や一度使った水をきれいにしてトイレに流す中水施設を入れていますが、実験室でそわらの管理をしていました。そのような正技術の取組みは、お金をかけない適正技術を畜産排水処理に普及させる後の活動へ展開していきます。

にも学生を連れていきました。今日も何名かベトナムやマルタなど宇井先生と海外調査に行つた人たちが見えています。私も94年にニカラグアへ同行した時、そこで桜井先生をはじめ見えたということがあります。

資料の説明ですが、「宇井さんの紹介で私は広い世界に知られるようになった」は『ある公害・環境学者の足取り』からの抜粋で、中西準子先生が書かれた追悼文です。中西先生は東大で宇井先生とずっと助手をなさった方で「二人いたからやつてこれた」と書かれています。「宇井純先生との思い出」は地域研究所年報からで、先週亡くなった秋山勝さんが地域研究所で出会つた宇井先生のことなどを書かれています。「身の丈に合つた適正技術を普及させよう」は沖縄リサイクル運動市民の会の眞喜志敦さんが書かれたレポートです。「日本のエコロジーの流れにおける沖縄の位置」は沖縄大學紀要からで、宇井先生が「エコロジーの源流・谷中村から水俣・三里塚へ」を書いた時の文章です。この本は、日本近世以降に記された自然をいかに見るかという記述の中から田中正造や牧野富太郎といった34人の文章を選んで、注釈を加えたものです。34人中、4人が沖縄の蔡温・謝花昇・徳田球一・安里清信です。エコロジーの思想ということでも、沖縄をとても重要な場所と考えていました。

2016年度

外部評価委員会

12月7日、2016年度外部評価委員会(稻垣純一委員長)が開催されました。本委員会は、学外の有識者から本学の中長期経営計画による教育研究活動や管理運営についてご意見をいただく貴重な機会となっています。

現在、第四次中長期経営計画(2014年度-2017年度)で策定された5つの基本戦略を実施しており、教育改革及び経営力強化に向けた全学的な取組みが進行しています。

第四次中長期経営計画 5つの基本戦略	
1 学生募集力の強化	2 魅力ある授業の創造
3 中退率の減少	4 就職率の向上
5 経営力の強化	

へ主なご意見

■ 計画期間 4年のうちの2年

が経過した時点で到達度3以上ということは、計画は順調に実施しているといえる。ところが計画通りに実施していく目標達成率が低い案件については、いろんな解釈があるだろうが、目標の立て方が施策とのバランスを欠いていたか、施策をもつと充実させておくべきだつたということなのだろう。

■ P D C Aサイクルを廻すという意味では、計画に対する教

職員の共有意識が出てきている数字だろう。教育面の指標評価区分では、どのように成果を表していくのかが課題だろう。

■ 今回の中間評価では、「やつたらこそ見えてきた」ことがあると思う。「一つひとつ数値化したからこそ見えてきた課題があり、その課題に対して学内できちんと議論をし共有する場がつくられることを期待している。

■ 中長期経営計画を教職員が共有するようになつたということだが、さらに10年後にどういう大学になるのかというビジョンに合わせて次期計画をつくると、さらに「体感が出てくるのではないか」。

■ 受け入れる側の大学は、学生には絶対にいい思いをして

られたけの魅力を感じているのか。教育の場であるからには、相手がどういう状況にあるのかを把握していかなければ授業などできない。魅力ある授業と一緒に魅力ある場所にするには、その場でしか出会えない体験がどうしたら生まれるのかを考えなければならない。

■ 入ってくる学生をいかに把握するのか、これは大変なことだと思う。やはり入学してから半年間のうちにそれをやらないではならないだろう。学生は学ぶから居場所もできる。部活もいい。しかし学生が学ばなければ、学校という場は力が衰えていく。その場に参加しないければ手に入らない学びを提供しなければならない。沖縄大学にはそれがあるというふうになつてもらいたい。

■ 人生に例えれば、沖縄大学は若くはない。かといって高齢でもない。壮年期なので体力を維持することに力を注がなければならぬ。その意味では体力以上のことがしつかりできているし、さらに体力を蓄えていく方向性も見えてきている。にじるこのようなP D C Aサイクルを廻し続けることによつて、目標設定もだんだん適正なものになつていくはずで、達成度も上がっていくだろう。そしてこの作業を続けることに

らわなければならぬ。「いい思い」とは何だろうか。来てくれた彼らがどんな世界を持っているのか、どういう体験をしてきたのか、学ぶということに

沖大にはその可能性があると思う。外部評価委員になつて関わつてみると、「沖大頑張っているじゃないか」と思うようになつた。

■ 宜野湾のある小学校の先生と会つたとき、沖大の学習ボランティアや教育実習生の話に褒めていた。こども文化学科は頑張っているんだと思った。

■ 最後に、長濱正弘理事長より、4年間にわたり忌憚のないご意見をいただいたことに 대하여委員の皆様に厚く感謝の意が表されました。

よつて沖縄大学の魅力の再確認ができる。このことを意識し続けることが大事だ。



2016年度

父母懇談会

ご父母との連携を密にして、よりきめ細かな学生支援を行えるよう、今年も後援会及び同窓会にご協力をいたたいて、夏季休暇中の9月に父母懇談会を開催しました。

9月2日（金）の久米島地区を皮切りに、6日（火）北部地区、8日（木）宮古地区、9日（金）八重山地区、13日（火）中部地区、17日（土）那覇・南部地区の6地区で行つた面談会では、学生の修学状況や課外活動、家庭での過ごし方など、普段目にするこの少ない様子を伝え、個別の相談機会を持たせていただきました。面談会終了後の懇親会では、後援会及び同窓会の役員の皆さまを交えて交流させていただきました。

今年もご父母の皆さまと一緒にできるのを楽しみにしています。（学生支援課 比嘉）

ご出席いただいたご父母は、嘉数昇明後援会会长の挨拶で始まった八重山地区的懇談会



嘉数昇明後援会会长の挨拶で始まった八重山地区的懇談会

沖縄大学は、来る2018年6月10日に創立60周年の節目を迎えます。記念すべき創立60周年を迎えるにあたり、大学同窓会、後援会そして評議員会が一体となつて、就学環境の整備に取り組んでまいります。具体的には、学生食堂の設置、アクティブラーニングのためのスペース整備、自習やアクティブラーニングのためのスペース整備、運動実習や部活・サークルのための施設整備、そして地域研究所を移転し、地域を共創するセンター機能を整備します。



沖縄大学創立60周年記念事業事務局

〒902-8521 沖縄県那覇市国場 555 番地

TEL 098-832-3216 FAX 098-832-6830
MAIL:60@okinawa-u.ac.jp○事業期間
〔2017年4月1日～
2019年3月31日〕

〔歴史記念資料室の設置〕

この期間に、各種施設の整備や記念イベント等を実施していきます。

○主要事業

〔学生食堂の設置〕

学生食堂を開設し、学生の福利厚生を充実させます。安心・安全、健康面に配慮したメニューや価格においても満足が得られる学生食堂を目指します。

〔別館及び隣接小グラウンドの整備〕

自習やアクティブラーニングのためのスペース整備、運動実習や部活・サークルのための施設整備、そして地域研究所を移転し、地域を共創するセンター機能を整備します。

創立60周年記念事業について

2018年6月10日



沖縄大学は県内で最も歴史のある私立大学です。建学の理念や地域と共に歩んできた歴史を知つていただくとともに「原点を見つめる場」として、歴史記念資料室を設置します。

〔2017年4月1日～
2019年3月31日〕

〔歴史記念資料室の設置〕

沖縄大学は県内で最も歴史のある私立大学です。建学の理念や地域と共に歩んできた歴史を知つていただくとともに「原点を見つめる場」として、歴史記念資料室を設置します。

2016年度 教員採用試験現役8名、過卒者含め36名合格

今年も沖縄県をはじめ全国の公立学校教員候補者選考試験が終了し、こども文化学科現役生8名が合格し、過卒者を含めると36名が合格しました。近年、本学出身の合格者数は増加しており、13年度9名(現役6名、過卒3名)、14年度15名(現役8名、過卒7名)、15年度28名(現役8名、過卒20名)となってています。現時点で把握している合格者数は左記です。

◆ 小学校(こども文化学科)現役8名

高校卒)

新垣玲名(那覇高校卒)、大城つ

かさ(知念高校卒)、鎌本拓弥(具

志川高校卒)、亀谷美晴(那覇高

校卒)、城間拓未(知念高校卒)

宮城朋夏(那覇高校卒)、宮國穂

乃花(浦添高校卒)、與那梓(那覇

◆ 小学校 卒業生24名

◆ 中学校 英語2名 社会1名

◆ 高等学校 地理歴史1名

※卒業生からも「合格した」と

の知らせが届いています。

◆ 小学校 卒業生24名

◆ 中学校 英語2名 社会1名

◆ 高等学校 地理歴史1名



本学は11月30日、ベトナムのホーチミン市師範大学と交流協定を結びました。

2014年に国際コミュニケーション学科の吉井美知子教授がベトナムでのスタディーツアーを企画して以来、本学の学生が毎年同大学を訪問し、これをきっかけに交流協定を締結することになりました。今後単位互換可能な交換留学や短期研修などが進められます。

同大学は、外国人のためのベトナム語コースを設置し、積極的に外国人留学生を受け入れています。調印式でグエン副学長より「沖縄からの学生を心を込めて歓迎する」と、挨拶をいただきました。

ホーチミン師範大と大学間交流協定に調印



近な事柄をテーマに「書くことが止まらなくなっている」。



「学P沖縄リーグ2016」販売金額部門で、1位！

第4回琉球新報 短編小説賞で

「サガリバナの咲く川辺で」が佳作に

本学図書館の糸数晃さん、

県内7大学の学生がコンビニ向け商品の開発や宣伝などに挑戦する、沖縄ファミリーマート主催の「学P沖縄リーグ」。10月前半の販売期間中、今年は沖縄大学の「ゴールデンタコライス」が、828万5千円を売り上げ、販売金額部門で1位になりました。

主催者からは「最も高い価格ながら、販売力が高く総販売金額で売上に大きく貢献した。男性をターゲットとした商品コンセプトの通り男性を中心とした支持が圧倒的に高かつた。ボリュームや馴染みのある食材の新しい組合せ提案が、消費者の目を惹きつけた」と評価されました。

昨年9月から小説を書き始めたという糸数さん。勤務をしている図書館でライティングセンターを立ち上げ、配属された作家の崎浜慎さんに「創作活動の醍醐味を教えてもらつた」。

今年5月の土曜教養講座で、登壇した芥川賞作家又吉栄喜さんの「普遍性ある小説を」という言葉に触発され、琉球新報短編小説賞に挑戦。作品では「どんなに苦しくても、どんなに貧乏でも、自分を見失ってはいけない」ということを表現している。

同作品は、3月に刊行される『沖大文学5号』(文芸部)で発表する。すでに新しい作品を創作中で、身近な事柄をテーマに「書くことが止まらなくなっている」。

平成28年度「私立大学等改革総合支援事業」に選定

同事業は、平成25年度より行われている文部科学省と日本私立学校振興・共済事業団による共同事業で、大学改革に全学的・組織的に取り組む私立大学等に対して、経常費・設備費・施設費を一体として重点的に支援するものです。本学は、昨年度のタイプ2「地域発展」に続き、本年度はタイプ1「教育の質的転換」に選ばれました。

今回、タイプ1のチェック項目である全学的な教学マネジメントや教育の質向上に関するPDCAサイクルの確立と多様な取り組みに関して高い評価を得ました。これは、本学が近年取り組んできた教育改革が順調に進んでいることを示しています。

今後もさらなる改革を推進し、「地域共創、未来共創の大学へ」に向けて、社会に貢献する共創力を身につけることができる教育を展開していくまことに。

編集後記

12月に学長選があつた。

学外でも「次の学長は誰か?」と聞かれたり、話に巻き込まれたり。地域の人人が学長選に関心を持ち、沖大の来し方行く末を語る。そして叱咤激励されたりする。(後藤)